

書名： **学校と社会**

(The School And Society)

著者： **ジョン・デューイ**

(John Dewey)

訳者： 宮原誠一

出版社： 岩波書店

出版年月： 1957年7月

総ページ数： 190ページ

ISBN： 4003365224



推薦者

西園芳信

鳴門教育大学理事・副学長

～学校教育の本質を考えた一冊～

私は、戦後の団塊世代として育った。私の家は、農家で九州の田舎で育ち、子どもの頃は、農作業の手伝いをした。田植え、稲刈り、麦踏み、サツマイモやジャガイモの植え付けや収穫など、あらゆる作業を手伝った。また、鶏を飼い、家畜の世話をした。こういった家の手伝いの中で、作物はどのような気候や土壌で育つか、また動物の成育について経験的に知った。

このような環境の中で育ったが大学進学は、田舎に帰り中学校の音楽の教員になるという約束で東京の音大を選んだ。この大学時代にいろいろな勉強をする中で、私が素朴な疑問を持つようになったのが「教育とは何か」ということであった。これに答えてくれたのは教育哲学の教授であった。講義の後の私の素朴な質問に、「教育は、学校だけで行われているのではありませんよ。日常の生活の中でも教育がなされていますよ。」こう言われ、「デューイの『学校と社会』を読んでみたら」と、この本を紹介された。

この教育書には、19世紀末のアメリカにおいて、子どもが家庭でする様々な生活経験（例えば、羊毛から糸を紡ぐ、石灰石を焼き金属を磨く沈殿白墨を作る、動物の脂肪から蠟燭を作る、卵料理・野菜料理・肉料理を作る等）を学校で経験させ、そこから地理、歴史や理科、図画工作等の知識と訓練、及び表現方法を得させ、子どもの人間としての成長を期待し教育するというようなことが書かれている。これを読み、私は田舎で農家の手伝いをして作物が育つ条件等、学校では知ることのできないことを経験していたが、これが認められたような気になった。これを契機に、私は音楽を教育の観点から研究するために大学院に進学するが、その後の研究の基盤になっているのは、ジョン・デューイの教育哲学であり、芸術哲学である。

『学校と社会』は、デューイが1894年以降シカゴ大学で哲学・心理学・教育学を合せた学部の学部長職をしているときに、彼の教育の考えを実験的に実証するために設置された実験学校（デューイスクール）に関わって、児童の父兄に対し実験学校の理念や方法を分かりやすく講演したものの記録である。子どもの生活経験を学校に持ち込み、例えば、綿と羊毛の繊維を比較したあと、羊毛を梳く道具を工夫し毛糸を作り織物にする等のオキュペーション（構成活動）によって、子どもの興味を引き出しながら教育を進めるという、いわゆる新教育の考え方が書かれている。

我が国の教育は、現在子どもの学力として思考力の育成が求められている。思考力育成の教育を考えることにおいても参考になる教育書である。

